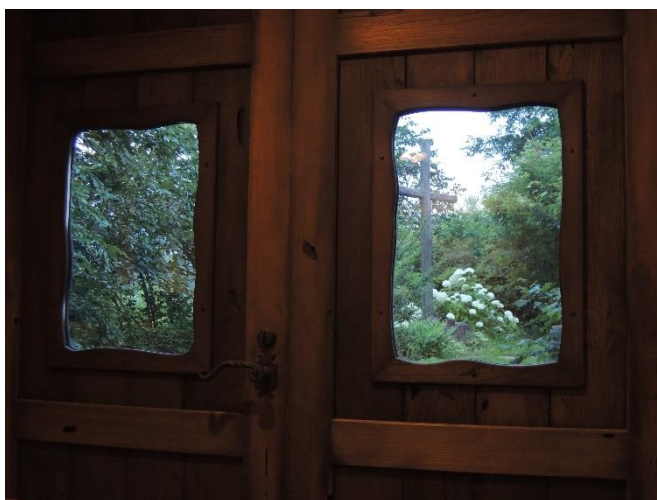


## 祖 国 い ろ い ろ

牧師 山本 護

日本の戦争の諸々を覚え、毎年8月中頃の礼拝で、私たちは日本基督教団のいわゆる「戦責告白」を唱えています。敗戦から22年を経た1967年の復活祭に公にされた戦責告白は、多方面から綿密に論じられており、内容に関して新たに述べることはありません。ただ、これが公にされて半世紀となる今日、その言葉遣いから見る国家観の微妙な差異を検証し、「クニ」のイメージを相対化することは意味があるかな、と考えています。



言葉遣いの微妙な差異とは、「祖国」。「まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました」とか、「わたくしどもの愛する祖国は～ふたたび憂慮すべき方向にむかっていることを恐れます」といった言い回し。「国」ではなく「祖国」と言うと、どのようなニュアンスが加わるのでしょうか。歴史や数多の事象が刻印された民族の記憶か、寄る辺なき者の望郷のセンチメントか。

人口に膾炙した寺山修司の短歌、「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」。望郷を刺激する虚構の歌なのでしょう。場面を想定すると「ギターを持った渡り鳥＝小林旭」と港のチンピラとのひと悶着が思い浮かんだ。「身捨つるほどの祖国」、さらに想像を跳躍させると、故郷を喪失させられた孤独なテロルにまで届きそう。そうなる古びた「祖国」は、むしろ現代を語るにふさわしい新鮮な言葉に思えて来ます。

イエスが十字架にかけられる時、祭りの恩赦で(マルコ 15:6)、「ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した(15:15)」。バラバは「暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒(15:7)」でしたが民衆に支持されていた。ということは、彼は帝国に支配された「祖国」解放に身を投じた闘士なのかもしれません。

究極的には、「わたしたちの本国は天にある。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っている(フィリ 3:20)」。仮住まいとはいえ、まだ少し時間に猶予があります。教団戦責告白が示している祖国なのか、「身捨つるほどの祖国」の構えなのか、バラバのような祖国解放運動なのか、どれでもいい。各々が思い描いている近くて遠い「祖国」と、何らかの決着をつけておきたいものです。今、時のある間に。Ω